279.5
19

始

歐洲大戰の教訓と青年指導

青年團中央部藏版

279.5-19

帝國圖書館藏

歐洲大戰の教訓と青年指導

陸軍中將　田中義一著

青年團中央部藏版
東京　新月社發行

大正
7.5.13
內交

歐洲大戰の教訓と青年指導目次

序　各國青年教育尊重の理由と其勃興の動機……三
一　英國少年斥候隊の起源と其目的……五
二　佛國青年指導の起源と其目的……八
三　獨逸青年團の起源と其統一……一一
四　何故に獨逸の青年指導法を知るべきか……一五
五　獨逸青年指導の根本主義……二〇
六　獨逸青年の體力養成と其成績……二三
七　獨逸青年の精神的教育の內容……二五
八　獨逸青年指導の實例……二九
九　獨逸の父兄が子弟指導の方法……三一

一一　獨逸青年の發展的指導法……三五
一二　日露戰爭に比べた歐洲大戰の狀況……三九
一三　獨逸の國民皆兵の實現と民心統一の原因……四四
一四　大戰に於ける獨逸の青年指導法……四八
一五　大戰中獨逸青年活動の狀況……五八
一六　列國青年活動の狀況と其指導……六一
一七　日本の青年指導に對する不安心……六五
一八　歐洲大戰の與へた事實的敎訓……七〇
一九　今後の日本の地位と青年指導の根本精神……八一
二〇　如何にして其目的を達すべきか……八八
二一　青年指導の實際的方法……九四
二二　青年指導上の態度について……一〇〇

序

私は先年命を受けて歐洲各國から米國を旅行した際に於て、自分の視察すべき本務の傍ら、各國の在鄕軍人會と青年敎育に關して色々の智識を得て歸るや『社會的國民敎育』といふ一書を著はし、各國に於ける主として高等小學時代から徵兵適齡即滿二十歲に至るまでの青年の敎育指導に關する概略を說いて、日本に於ては之を如何に敎育し指導すべきかについて卑見を述べて置いた。けれども其後に於て時代は甚しく變化し、世界の趨勢は驚くべく進步した。加ふるに歐洲の大戰は、我々に與へるに數多の事實的敎訓を以てした。私は則ち今後の中心國民であるべき日本の青年は、此際如何なる覺悟をなし、如何なる修養を積むべきかまた如何にしなければ新時代の國民たることが出來ないかと云ふ事を說くのは、

今日に於て最も急務中の急務であるべきを思ひ、新に青年及び新時代の國民の精神修養に資すべき一書を著はすに方りて、別に青年の指導者に對して、大戰が與へた教訓に鑑み、今後の青年の指導教育に關して執るべき大綱や根本精神やについて、所思の一端を述べんとしたものが卽ち此書である。されば此書は、青年や新國民の精神修養書たる別著『青年修養談』と共に、一個の姉妹篇をなすものであつて、これは青年の指導に從はれる人々に對して他山の石たらんことを期するものである。

なほ最後に一言附け加へて置かなければならぬことは、此書は近頃私が談話した事柄と演說した事柄とを、書籍の體裁に整理させ、それを出來る丈け讀み易いやうに、幾分か筆を加へさせたものであるといふことである。

大正七年四月

著者識

歐洲大戰の教訓と青年指導

陸軍中將　田中義一著

一　各國青年教育尊重の理由と其勃興の動機

青年の教育、青年の指導といふことは、今日世界の各國に於て、只一個の教育上の問題ではなく、其宜しきを得ると否と、それが振ふと振はないとは、直ちに國家の運命に關するものとされてゐる大問題である。卽ちその發展の如何によつて、一地方は、ふまでもなく、一國さへも勃興するか衰亡に赴くかするものであると考へ、各國の國民が、凡ての階級を通じて、心血を注いで居る問題は、實に此青年の教育指導といふことである。つまり第二の中心國民である青年に對して

單に智識を注入して、所謂文明的事物を與へた丈けでは、彼等は將來國家の運命に關はる重要な問題を擔ひ、之を立派に解釋してゆくことは決して出來ないものである、それではならぬ、といふ國家的觀念から、青年の體力を盛にし、彼等に十分な元氣と活動力とを附けて、彼等の觀念を始終國家的に導き、そして彼等をして將來國家の運命を擔つて立てる丈けの人格と能力とを具へしめたい、そして絶へず新しい時代に役に立つ丈けの立派な健全な國民を作りたい、又さうするといふことは、年長者たる國民が、國家に對して爲さなければならぬ當然の義務であると云ふ眞の自覺が一般國民の間に湧いて來て茲に此青年敎育といふ問題は今日のやうな重要なものとなるに至つたのである。

けれども世界の各國民が、斯樣に一般に青年の敎育指導の必要について自覺して來たといふことについては、皆それ〳〵其動機がある。それは一口にいへば、凡ての國々が、色々の國民的の危難に出遇つて、國の生存について、一種の恐怖心を起し、それによつて一般人心が刺戟せられたからのことで、つまり一旦災難に出遇つたから、これではならぬと元氣を出して自覺したものであるやうに思はれる。私は今英佛獨三國に於ける青年敎育の勃興の動機や起源並に發展の經過について少しく說いて見たい。

二　英國少年斥候隊の起源と目的

英國に於ける青年指導の起源は、彼の十九世紀の末年に於ける南阿戰爭にある。元來英國民の中で、中流以上と以下との間には非常な相違がある。中流以上の英國民は所謂紳士であつて、甚だ謹嚴で、愛國心も强く義務心も厚い、立派な、國民であるが、中流以下の下層の民となると、それと全く正反對で、吾々から見て

も全く墮落した民である。彼等は行儀も惡く、義務心も乏しければ愛國心も薄い、唯一日の勞銀が幾らであるかといふことしか頭にはない。かういふ風であるから、歐洲大戰の起つた後に於ても、愛蘭には內亂が起り、石炭の坑夫は同盟罷工をやる、兵器彈藥工場の職工さへ同盟罷工を起した、徵兵制度の布かれない昨年以前に於ては、募兵に應ずるに給料が幾何かといふことが主なる問題であつた。かういふ風に、英國の國民精神といふものは、近來に於ては甚しく弛んで居つた。何とかして國民の精神を結束しなければ、英國の盛名は最早維持して行けないやうに思はれるまでになつて居た。その狀態の遺憾なく現はれたのは、彼の南阿戰爭である。英國はあの野蠻なボーア人を攻めるに、二十倍も多い兵力を以てしても、容易にそれを征服することが出來なかつた。今日猶バアデン●パウエルといふ人の總指揮官をしてゐる少年斥候隊は卽ち此時に起つたのである。

此少年斥候隊の誓とする所は忠君愛國と、規律を守ること、自分の快樂の爲に人を妨げることなく、却つて自分を犧牲にして人を助けるといふことであり、從つて名譽と信義を重んじ、皇帝及上官に忠實に、禮義を尊び、命令に服從し、凡ての思想言語動作を高潔にし、勇敢にして快活でなければならぬといふのが、彼等の守るべきことであつて、之によつて英國全土の少年に愛國心を注入し、彼等を善良な剛健な國民に導いて、英國の國民性を漸次に鑄直し、世界最强國の一つとしての英國の盛名を完全に維持して行きたい、これが卽ち英國少年斥候隊の目的なのであつて、最初はバアデン●パウエル氏一個人の考から起つたものであるが、今日では社會からも政府からも經濟的方面からも、其活動の有益であることを認められ、英國の全土到る處に設けられて、不時の天災だとか、其他色々の救助の必要の際には、勇ましく立働いて居るのである。

三　佛國青年指導の起源と其目的

佛國に於ける青年指導、青年教育の起源は、一つには此國が嘗て獨逸から屈辱を受けたことに原因して居るのである。卽ち佛國は千八百七十年の普佛戰爭の結果として、アルサス及びロオトリンゲンの二州を獨逸に奪取られた。此屈辱はどうしたらば雪ぐことが出來るだらうか、これは佛國民の今に忘れることの出來ぬことであつて、それが爲佛國に於ては、國民をして何時までも此復讐の精神を忘れさせないやうにと、今も猶色々な方法を講じて居るのである。例へば彼の小學校に於て獨逸人が佛蘭西人を虐待して居る圖や、佛蘭西人が戰に敗けて居る圖などが皆額にして掲げてあり、巴里にある有名なる記念像に、今だに喪服が著せてあるのは、云ふまでもなく、皆之れ國民が其屈辱を忘れてはならぬといふ意味である。ところで佛蘭西といふ國は、ナポレオン時代には、歐羅巴全土の統一さへ

も計りかけたといふ歷史をもつた國である。其當時に於ける佛國民の愛國心といふものは素晴しいもので、何れの國も畏敬して居た程である。そして又此國は嘗ては文明の中心とも云はれた國である。ところが時の推移と共に、斯のやうな榮譽ある國民の間にも次第〳〵に個人思想が發展して來て、それと共に漸く愛國心が薄くなり、國民の間に國家的犧牲の觀念が乏しくなつて來た。

卽ち此薄くなつて來た愛國心を皷舞し、國家的犧牲の觀念を强からしめると同時に、獨逸に對する復讐の精神が衰へないやうにといふこの二つの理由から、佛國に於ける青年の指導敎育といふことは漸次盛になつて來たのであるが、佛國といふ國は、由來獨逸に比べて遙に人口が少なく、動もすればそれが減少せんとする氣味があるばかりでなく、獨逸は此戰爭前から盛に兵力を增すといふ有樣であるので、佛國は到底數の點から、兵力に於て獨逸に對抗することは出來ない、そこで數こそ少くとも、其兵の質を善くして、精神的にも體力にも能力にも、獨逸

に優つた軍隊を作らなければならぬ。かういふ考から佛國に於ては、青年の指導教育といふことに非常に重きを置くやうになり、徴兵制度と同樣に、青年の指導といふことを一個の義務制度のやうにし、青年の教育といふことが、卽ち國防其者であるといふやうな風にまで進んで來たのである。從つて、佛國の青年の指導法といふものは、殆んど軍隊的であつて、つまり優良な青年を養成するといふことは、佛國では直ちに立派な軍人を作るといふことに歸着して居るのである。例へば小學校に於ても、戰爭前から、毎日一時間づゝは必ず體操をやらせて、將校が嚴重な監督をする。生徒は特別な事情のない限り、勝手に缺席することは出來ぬといふ風に嚴重にし、其他にも射擊令とか、軍事豫習令といふやうな、色々な設備があつて、歐洲各國中此國位青年の指導に努力して居る國はないのである。今の大統領ポアンカレイ氏も、此方面に向つて非常に努力し、戰爭前に於ては、それが爲に到る處に講演や視察をして居られたのである。佛國が歐洲大戰にあれ

丈けの力を出し得たのは全く斯ういふ所に原因があると思ふ。

四　獨逸青年團の起源と其統一

それでは獨逸の青年團といふものは如何して起つて來たかといふと、かの十九世紀の初頃に於て、普魯西の國土は、ナポレオン軍の馬蹄によりて散々に蹂躙せられ、其國民は慘めな敗北者の苦い經驗を嘗めた。此屈辱に對して獨逸國民の恨は骨髓に徹つたのである。何とかして復讐を行つて、國の權威を恢復しなければならぬ。所が此屈辱を中年以上の人によつて雪ぐといふことは容易ではない、其責任を依托すべきは正に次代の中心國民である青年でなければならぬ。かういふ考の下に、既に千八百十年頃から、獨逸は國民的教育として大に體操運動を奬

勵し、青年の身體の强健を計ると共に、愛國の精神を皷吹するに努めたのであつたが、此國民的自覺は、千八百七十年に至つて、遂に見事な効果を奏すこと丶なつた。戰勝に醉はなければならぬ獨逸は此時何をしたか。此處が頗る活目に價する所である。

今や多數の軍人は戰勝の名譽を戴き、厚い恩賞を受けて鄕里に錦を飾らうとする。けれども此軍人が、再たび鄕里に歸つて、萬一自分の名譽に誇り、或は恩賞の爲に驕りを增長するといふことがあつたらどうだらう。獨逸は再び悲慘な狀態に陷らなければならぬ、それは大變だ。今日戰に勝つたといふことは、卽ち他日再び負ける所以とならないとも限らぬ。吾々は今日に於て、既に他日の準備をなし、今日の名譽を、他日の敗北によつて汚すといふことのないやうに覺悟してかゝらねばならぬ。今戰ひ勝つた吾々は、卽ち此處で冑の緒を緊めなければならぬ。一旦敵を殪したからといつて、直ぐに冑をぬいで休むといふことは、卽ち他日敵

に殪されるといふことである。それではいけない、再び攻めて來るに定つてゐる敵を、新なる勇氣を以て迎へるといふ覺悟がなければならぬ。冑の緒を緊め直して、更に大に勝つべき準備をしなければならぬ。獨逸皇帝は此處に氣がついて、佛蘭西のベルサイユ宮殿に於て、卽位式を行ふと同時に、同じ宮殿で在鄕軍人會を組織し、自ら其總裁になつたのである。そして其時、在鄕軍人が、行賞に誇り安逸を貪り、驕に流れるといふやうなことが萬一にもあつてはならぬ、在鄕軍人は深く之を戒め、謹嚴にして勤勉な、愛國心に富んだ、義務心の厚い國民となることを忘れてはならぬ、といふことを宣言した。つまり戰勝の後は國民が安息に耽りたがる、民心に締りがなくなる、之を防いで國民の結を堅くして、次の戰に負けることのないやうに、國民に鞭韃を加へて、益努力せしめんとしたものである。

かうして獨逸に於ては、普佛戰爭が終ると同時に、在鄕軍人會が設けられた一

方に於て、一旦見事な復讐をして、佛國に對しては久しい間の恨を晴したけれども、何時また此仇を取られるかも知れぬについては、今から十分に青年や少年の身心を訓練し開發して置いて、他日國家に事ある際の爲に備へて置かなければならぬといふ考から、劍術や旅行其他の運動を奬勵するといふことが甚しく盛になり、傍ら佛國の青年指導法に刺戟せられて、運動奬勵の色々の團體が各地方に起り、それが各々勝手に發達するに委されてゐた。所が近年に至つて、獨逸に於ける青年の指導法は、餘りに體力の養成のみに重を置き過ぎて、精神の方面の注意が缺けて居るといふ議論が沸き出し、其中庸を行つて、體力を練ると同時に、精神の健全な所謂獨逸魂をもつた剛健な國民を作らなければならぬといふことから、歐洲大戰中土耳古で戰死した有名なるフォン・デル・ゴルツ元帥は千九百十一年自ら其の長となり、これまでの各種の青年諸團體を統一する目的を以て、青年獨逸團なる團體を組織することゝなり、それと同時に、各聯邦では國王若しくは其世子が各聯邦國の青年團の總裁となり、其上を更に獨逸皇太子が總裁することゝなつたのである。

五　何故に獨逸の青年指導法を知るべきか

かういふ風に、各國に於ける青年指導の起源なり勃興の動機なりの模樣を見て來ると、青年の敎育指導といふことは、つまり青年の體力を養成して、彼等をして剛健な元氣ある國民に仕上げると同時に、彼等の頭に愛國心を十分に吹き込み、どこまでも彼等を國家的に導いて、能く新時代の國家を擔うて、立派に青年としての責任を果せる丈けのものに敎養するといふことであつて、またそれが國家の盛衰興亡にどれだけ深い關係をもつてゐるものであるかといふことが、自ら明

瞭になつて來るのである。從つてまた之が指導に對して、今日吾々が全力を盡しても、猶ほ及ばないことを思はなければならぬ程のものであることが了解されるのである。

ところで我日本は嘗て露國と戰つて大勝を得た。そして久しく露國の復讐に向つて警戒を怠らなかつたのであるが、歐洲大戰は茲に局面の轉換を生じて、露國は再び立つまでに多大の時日を要する程、國家の狀態混沌として、行末如何になり行くかさへ聊か推測し難いものとなつた。けれども吾々は最近青島に於て、獨逸を敵として戰つた。そしてまた當然の勝利を得た。獨逸は云ふまでもなく之を恨として、何時かは其復讐を試みやうとするにちがいない、吾日本の將來に於て最も警戒しなければならぬのは獨逸であることゝなつた。

何故に私は斯くいふかといふと、それには深い理由がある。獨逸皇帝は既に歐洲大戰前に於て嘗て次のやうなことを考へて居た。獨逸が將來發展して行かなければならぬ東洋に於て、如何にも邪魔になるのは日本である。吾々は如何にかして之を始末しなければならぬ。今一度露國を唆かして、日本に復讐戰をさせて、吾々が尻押をしてやつたならば、さすれば日本を擲きつけることは何でもなからう。それが出來たらば、日本の北半分は之を露國に與へて、豐饒な南の半分は獨逸の有にする、さうして日本國民を、丁度猶太人のやうな、本國のない世界流浪の國民にしてやらう。いや待て、日本と云ふ國は成程獨逸の眼の上の瘤ではあるが、今日の日本の國情を見ると、此瘤の內部は漸次化膿しつゝあるやうだ、打ちやつて置いても獨り手に腐つて來るのだ。急いではいけない、見て居る中に、屹度自分から倒れる時節が來るのだ。今日の日本は自分の國に美點のあることを忘れて、英米佛や其他の諸外國の眞似ばかりして、個人思想が頻りとはびこつて、祖先傳來の尊い精神はだん〳〵と消えて、國民の體力は次第に衰へて來つゝあるではないか。急ぐには及ばない、腐がまはつて自然と瘤のとれるのを待つに如

くはないと。誠に不愉快千萬なことではあるが、獨逸皇帝が、かく考へたのには原因がある。現に戰爭前までは、獨逸から來た大勢の將校連は、日本の軍隊附となつて、間諜的に色々なことを探つては、種々な手段を以て、日本の內情を皇帝に報告して居たのである。私共は曾て或手段を以て、其報告を見たのであるが、彼等將校等の研究題目といふのは『日本は何が爲に日露戰爭に勝つたか、日本の强きは何處にあるか』といふことであつた。彼等は之に對して如何なる報告をなしつゝあつたか、『日本國民の頭の裡には、眼に見えない非常に鋭利な武器がある。此武器こそは日本をして强からしめて居たのだ。けれども此武器は今や漸く錆を生じつゝある。そして國民は之に手入をすることをしない。日本が今も强いといふのは買被りである。將來の日本は決して恐るゝに足らないものだ』、かういふ報告は頻りに獨逸皇帝に奉られ、從つて皇帝は前に述べたやうな考を抱くに至つたのである。

成程歐洲大戰の間、獨逸は一時東洋に手を延ばすことは出來なかつたが、戰爭前に於てすら、獨逸は前に述べたやうな考を日本に對して持ち、東洋に於て一大勢力を得やうとして、既に色々な政略や方法を講じつゝあつたのであるから、日本が獨逸に對して恨を買つた今後、再び世界が平和になつた曉に於ては、獨逸が改めて東洋の天地に、色々な方面に手を延ばすと同時に、永久の恨のある日本に對して、益肉薄して來るに違ないといふことは、決して疑ふことの出來ない事實である。私が日本は將來益獨逸を警戒しなければならぬといふのは蓋し故のないことではなからう。

私は卽ち日本に於ける今後の青年の指導に於いて、如何なる覺悟が必要であるかを語るに先つて、今日に於ては勿論、今後獨逸が如何にして其青年を指導せんとしつゝあるかについて、少しく詳かに說かなければならぬ。之れ決して他を稱賛し、追慕する意味ではないことは勿論であつて、他の長所をとつて、吾が短所

を補ふといふことが、最も必要なことであるが爲ばかりでなく、今後の日本の强い相手である獨逸の狀況を十分に知つて置くといふことは、自らを强くし其相手に優る上に於て、甚だ好都合なことであるが爲である。云ひかへれば今後吾々は獨逸を益〻警戒しなければならぬことゝなつたから、獨逸の强い原因である青年指導法について、十分に知る所がなければならぬのである。

六　獨逸青年指導の根本主義

私は嘗て青年獨逸團の部長たるフォン・デル・ゴルッ元帥に遇つて、獨逸に於ける青年指導の方針について聞いたことがある。其時元帥は述べて云つた。

『政府が國家的に統一した青年團でも、私の國の一般の風習として兎角軍事的に流れ易いといふ傾がある。大體自分としては、獨逸魂の涵養を原として根氣精力を盛にし、規律ある勤勉な國民を作り、それ〳〵自分の撰ぶ所の職業に向つて大に發展させ、他の國民に打勝つやうにさせて行きたいと思つて居る。決して青年をして悉く軍人たらしめるといふ考を持つ必要はない。今日獨逸の青年として必要な要素は、社會の惡風に感染せず、種々なる危險思想に誘惑されず、剛健な氣風を備へて、獨逸魂の滿ちた國民であることであつて、さうであれば又一番いゝ軍人になれるのである。此點に於ては、日露戰爭の經驗を積んだ日本が、寧ろ吾々の先覺者である。然らば軍事上の智識を青年の頭に注入するについては一體どの位の程度に止めるかといふと、敢て好んで軍事上の事を注入する譯ではない。卽ち青年の元氣を盛にし、體力を練るといふが爲には、始終運動させる必要がある、ところで運動といつても、青年は活潑なることを好み、軍隊的なことを喜ぶのであるから、詰り其嗜好に適ふやうな運動をさせるといふ丈けであつ

て、必ずしも軍隊的の事柄を青年に注ぎ込まふといふ觀念もなければ、決してそれが目的でもない。又軍事的の事柄といふても、形の上の事といふよりは、寧ろ智識の上にて、必ずしも軍人といはず、誰でも常識的に知らなければならぬ事柄を敎へて居る。例へば方角の判定法だとか、地圖の讀み方だとか、極めて一般的にて、勿論軍人にも必要であるやうな、極めて初歩の智識を彼等に與へるといふに過ぎない。では其青年指導上の經費は何處から出すかといふと、多くは地方特志家の寄附や、青年の父兄又は雇主等の寄附金を以て辨じて居る。又青年の體力を練る爲には、色々な遊戯や、游泳なども行ひ、行軍若しくは野營の眞似などをする場合には、多くは現役軍人又は在郷軍人などが監督の任に當つて居る』と。

獨逸青年團の內部の細かいことや地方地方の狀況は、皆それ〳〵異つて居るだらうが、獨逸青年團の指導上に於ける根本主義といふものは、ゴルツ元帥の話によつて大體窺ふことが出來るであらう。

七　獨逸青年の體力養成と其成蹟

獨逸が青年の指導について、最も努力する所は何であるかといふと、第一が卽ち體育である。然して其成績が如何に現はれてゐるかは次の表を見ると自ら明である。

歐米人及日本男學生體格營養比較表

（數字は身長三分三厘に對する體重にして、日本學生の年齡は滿二十歲を標準とす）

一、瑞典、諾威人	一〇二匁	二、獨逸人	一〇〇匁
三、米國人	九九匁强	四、佛蘭西人、白耳義、瑞西人	九九匁嗣
五、英吉利人	九八匁	六、西班牙人	九七匁
七、日本士官候補生	九五匁	八、日本幼年學校生徒	九二匁
九、日本師範學校生徒	九一匁	一〇、日本學習院生徒	八九匁
一一、日本中學校生徒	八八匁		

前表を見ても分るが如くに、世界の體操の本場である瑞典人については、一番

強いのは獨逸人である。ところで獨逸國民が體力の養成に重きを置く理由は、今更之を説明するまでもなく、何をするにも體が丈夫でなければ成功するものではない、殊に生存競爭の烈しい今日の世界に於ては、學問に加ふるに、自覺心と人格と體力といふものがなければ、世の中に立つて決して活躍することは出來ない、つまり實際社會に役に立つ人間となることが出來ないからである。されば獨逸に於ては、先づ此點に注意し、それが爲には上下擧つて熱中して居る有樣である。

丁度歐洲大戰の幕が開かれてから半年ばかりした頃であつたと思ふ、『獨逸では近頃青年の體育に從事してゐる教員の數が、甚しく減じて來た。一體此國で專門に體育に從事してゐる教員は凡そ百二十萬人あつて、その中約半數は最早召集された、獨逸は此體育從事の教員が乏しくなつて甚だ困つてゐる』といふことが或新聞に書いてあつたが、これ等の事實は決して詐ではない。ところで、戰爭前の獨逸の人口は、朝鮮を加へた日本の人口よりも稍少くて、大凡六千六百萬人しかなかつた。此中で體育に從事してゐるもの丶數が百二十萬人といへば、實に全國民の大凡五十分の一に當るではないか、獨逸が如何に體育に重きを置いてゐるかといふことは、これを見ても大抵想像することが出來やう、そしてかういふ風に體力が強いからこそ、獨逸に凡ての事業は發展するのである。學問は勿論、農工商いろ〳〵の實業が非常に盛になつて來つ丶あつたのも、要するに體力の强いといふ所に重なる原因があると思ふ。

八　獨逸青年の精神的教育の內容

獨逸が青年の體力養成について努力してゐる有樣は前に述べた如くであるが、

青年の精神陶冶に盡して居る有樣も傾聽に價するものがある。卽ち獨逸に於ては、ゴルッ元帥の述べたやうな根本主義に基づいて、國民の德義心を養成し、之によつて所謂獨逸魂を完成させやうとして居るのである。それではその所謂德義心といふのは何であるかといふと、第一が協同心、第二が服從精神、第三が規律の嚴守であつて、此三大德義心を養ふといふことが、獨逸青年團の唯一の目的なのである。

凡そ協同といふことは凡ての事業の根源であつて、又其發展成功の基である。愛國心もつまり此協同心の發露たものである、自治政が圓滿に行はれるといふのも協同の力である。服從といふことは、必しも人に頭を下げて、何でもいふことをきくといふのではない、法令なり規則なり、又は規約なり、命令されたことなりを立派に守るといふことである。成程、規則なり規約なりが、立派にまとまるまでは、十分に之を研究もし議論もするがいゝが、之れが一旦決つてしまへば、

凡てそれに服從し實行しなければならぬ。まして、國家の法律や命令を輕んじて、それを守らぬといふやうなことは、國民たるものゝ最も大きな不德義であつて、又立派な國民たる資格がないものである。それから規律を重んするといふことは、凡て自分〳〵の起居動作を規則正しくするといふことである。物事を几帳面にするといふことである。だらしがないとか、ずぼらなといふことは、人として最も賤むべく恥づべきことの一つで、さういふ人は何事にも成功するものではない。朝起きることから、食事をすることから、一家の整理などについても、又は自分の仕事をする上にも、人は皆其處にキチン〳〵とした處がなければならない。さういふ人間であつて、始めて立派に成功することが出來るのである。一體獨逸に於ける凡ての事業が近來盛に發展して來たといふのは、元來獨逸人といふものには、組織立つた頭がある上に、きちん〳〵と凡てを計數的でやるといふ長所をもつてゐるからである。だから彼等は何事をするにも順序を立て、凡ての事をちや

んと計數的に考へてからかゝるのであつて、さて愈それで善いと定まれば、其次には極めて固い意志を以て、飽までそれをやり通すのである。最初から杜撰な疎末な考の下に、事を始めるといふやうなことは決してしないのである。又さうしないことを非常に警めてゐるのである。勿論日本の中學校あたりでも、かういふことには可成な注意が拂はれてはゐるが、獨逸人が物事を几帳面にするといふことについての青年の指導の仕方は、日本の中學などと異つて、注意の度合に餘程差があるやうに思はれる。

兎に角此三つの德義心を、十分に青年の頭に注ぎ込んで、有爲な、活動的な、剛健な氣象の國民を作りあげやうどするのが、獨逸青年團の精神上に於ける努力なのである。

九　獨逸青年指導の實例

私は次に自分が實地參觀した所を基礎として、獨逸の青年が如何に指導し敎育されつゝあるかの實際的方面について少しく述べて見たい。

獨逸青年團が、青年の協同心を養成する上に於いては、苟くも青年團の一員である以上は、どこまでも自分といふこと、一身といふことを忘れなければならぬ、青年團といふ一個の團體の爲には、一身の利害關係などを考へてはならぬ、凡て自分一身のことは、青年團といふものゝ爲に犧牲にするといふ考でなければならぬ、自分は青年團といふ大きな塊の中の一人であつて、決して個々別々の一個人ではない、といふ考を、青年の頭に吹き込むことにつとめ、凡ての事をするに協同的に導いて、決して個人々々が放縱に流るゝことを許さないのである。

獨逸の青年が規約を守るといふことは、非常に嚴重に行はれて居るのであるが、

それを守らせるが爲には、青年に向つて誓はせるばかりでなくて、青年の父兄なり備主をして其責任を負はせるのである。つまり青年團の規約といふものは、青年の父兄や、備主や、工場主など丶相談の上で『これなら宜しい』『これでやらせよう』といふ風にして出來たのであつて、青年ばかりにそれを守らせやうとするといふよりも、備主や指導者に責任を負はせ、殊に母親が嚴しく干渉するといふ風になつて居るので、自然と青年をして規約を勵行させることが出來るやうになつて居る。そして凡ての事を几帳面に勵行させるについては、勿論色々の方法が行はれてゐるが、最も一般普通に行はれてゐるのは、青年時代から一つの帳面を持たせて置いて、青年をして毎日其日の出來事を書かせる。小遣錢の出入も記させる。或は其日に聞かされた事や、敎へられた事や、爲した事やを規則正しく書かせ、指導者は一々それを點檢する。そして其際曲つた字を書いたり、亂雜な書き方をしたりしたら、決してそれを見遁がさないで、手本を示して、立派に分り易く書き直させるといふ方法である。

けれども私が獨逸のミュンヘン市の一補習學校で見たやうな方法も、一種の面白いものである。生徒は大凡五六十人もあつたやうだが、彼等は其服裝や樣子から察すると、大抵、工場に出てゐるものとか、徒弟のやうなものであつた。私は其生徒を如何するのかと思つて暫く見て居ると、大凡一時間もかゝつて、その五六十人の生徒を、一々正しく列ばして居るのである、縱から見ても橫から見ても、只一本の糸を引張つたやうに、顏や頭の保ち方から、身體の各部の保ち方に至るまで、極めて嚴重に整頓させるのである。そしてそれを實に小一時間もかゝつてやるのである。それが濟むと何をするかと思ふと、隣室に連れて行つて音樂か何かをやつて、暫く慰安を與へた後で、直ぐに歸宅させたのである。此は一寸考へた丈けでは、簡單な何でもない事のやうであるが、つく〳〵と考へて見ると、其處に面白い意味の含まれて居ることが分るのである。それはどういふことかとい

ふと、かういふやうな職工だとか徒弟だとかいふものは、平素の起居動作が兎角放縱に流れ勝ちである。そこで斯ういふ方法によつて、彼等の頭の中へ、規律といふ觀念を注ぎ込まうといふのである。どれ丈け時間をかけても、規則正しく、自分といふものを整頓する習慣をつけさせやうとするのである。けれども只窮屈な思をさせた丈けでは面白くない、だから、其後では、唱歌をやらせて、樂しげに歸つて行かせやうとするのである。私は此やり方に少からず面白味を感じたのである。

一〇　獨逸の父兄が子弟指導の方法

青年團の指導者以外にも、親達が子弟を指導して行く上に於て、どれ丈け行屆いた注意をしてゐるかは、私が農村で見た次の例によつて知ることが出來る。獨逸の農村の親達は、其子供が就學年齢の頃になると、一坪か二坪位の地面を子供に與へる、さうして其地に植附けるべき馬鈴薯や麥などの種子を與へる。初めの年は手傳つてやつて、兎に角に其處に何かを植附けさせる、素より手入れも不十分だし種子を下ろすことも不完全だから、收獲といふ程の收穫のあらう筈はない、けれども兎に角種子を植附けたからには何かゝ出來る。出來た收穫物は親が必ず買つてやる。そして其價を拂つてやつて、自分が働いた勞力の報酬であることを子供に知らせる。そして其子弟に與へた金はどうさせるかといふと、必ず徵兵保險に加入させて、今得た所の金を以て、保險料を掛けさせてゆく。さうして一方に年齢に比して、幾らかづゝ地所の面積を增してやり、かうして徵兵適齢まで、不斷に繼續させてゆくのである。そして當人が徵兵適齢で檢査に合格して、入營するといふ場合になつても、親の方では別に何事もしてやらないのであつて、青

年は其頃には大凡四五百圓になつてゐる保險金を利用することが出來るのである
から、決して親兄弟に迷惑をかけるやうなことはなくて濟むのである。卽ち我日
本のやうに、子弟の入營中に、親兄弟が小使錢を貰ぐといふやうなこともなけれ
ば、從つてそれが爲に親が不自由を感ずるといふやうなこともないのである。

つまり獨逸の農村に於ては、かういふ風にして、勤勞といふことが大切である
こと、それは決して空しくなるものでなくて、必ずそれ相當の酬のあるものであ
るといふことを、子供の時から敎へ込むと同時に、浪費をしないで、貯蓄をする
といふことが、どんなものであるかといふことを、青年の頭に打込むのである。
その結果子弟が入營した時でも、親兄弟の方で何一つ不自由を感ずるでもなけれ
ば、子供自身もそれが爲に不自由を感ずるやうなことはないのである。かういふ
青年の指導法は、吾々にとつても、少からず參考になることゝ思ふ。

一一　獨逸青年の發展的指導法

誰も知つてゐるやうに、獨逸の國民は、到つて積極的な發展的な國民である。
それは歐洲大戰に於ける獨逸の態度を見ても直ぐに分るのである。西英佛聯合軍
に對する方面に於ても、東露國に對する方面に於ても、獨逸の兵力は、百萬乃至
百五十萬宛も少ないに係らず、絕えず攻勢を執り來つた。そして例の堅固な佛國
のヴエルダン要塞の攻擊の際の如き、十七八歲の青年軍が、盛に肉彈を打ちつけ
たのである。十七八歲の青年軍が魂の籠つた肉彈を打つけるといふ、此攻勢的な
勇氣といふものは、平生から發展的な國民でなければ出來ないことである。今日
西部戰場に於ける獨逸の態度も、これと同じく、どこからどこまでも猛しい攻擊
的なもので、敵ながら天晴れ見事なものである。

かういふ風に、獨逸人は其國民性に於て發展的な國民であるから、世界中到る

處に横行してゐるのである。亞米利加に於ても、濠洲に於ても、東阿弗利加に於ても、到る處に於て盛に活動して居るのである。獨逸の此攻勢的態度は、必ずしも殖民事業や貿易事業に於てばかりでなく、學問に於ても、研究に於ても、農業に於ても、工業に於ても、實に有ゆる方面に現はれて居るのであるが、私が一農村に於て實見した一例は、よく獨逸人が世界的に發展する理由を説明するに足るものだと思ふ。それは又私が或る補習學校を參觀した時のことで、教室には南米ブラジルの地圖が掲げてあつたが、之に對する教師の説明の仕方は、之を聞いて居る青年をして、如何にも自分から飛立つて行つて、其處で大に働いてやらうといふ氣を起させるに足るほど巧妙を極めたものであつた。例へば先づブラジルといふ國は、どれ丈けの生産力があつて、一日働くと何れ位の金が儲かる。そして生活する爲には何れ位の費用が入る。差引すると幾何〳〵殘るから、何年間其處で土地を借りて働けば、凡そどれ丈けの事業を起すことが出來る。そして彼地に行けば斯ういふ會社があつて、萬事は其處で世話をして呉れる、其處へ行くには何處行の汽車に乘つて、何處でどういふ汽船に乘ればいゝ、其汽車賃が何程で、船賃が何程、金は何程位もつて行けば、汽車賃も船賃も食料も支拂つて、彼地へ行つて幾ら餘る、其餘つた金で希望する土地に行つて、どういふ風にすればどういふ職業が見つかると、斯ういふ風に、何から何まで手を執つて教へるやうに説明するのである。聞いて居ると、俺も一つ行つて働いてやらうといふ氣が起らなければならぬやうに敎へるのである。獨逸國民が發展的になるのも當然だと思つて、私は感心もし、興味をもつて聞いたのであつた。

ところが過ぎたるは及ばざる如しといふ諺があるが、獨逸の國民は、かういふ風にして、餘りに多く海外へ出て行つて働くといふことに傾いた結果、遂には國内で働く人の手が足らなくなつて、却つて外へ出て働かうとするものを制限する爲に、移民制限法といふものを布かなければならぬやうになつたのである。成程

さうかも知れない、戰爭前に於て、獨逸國民が海外で働き上げる金は、一年三百億マーク卽ち百五十億圓といふ巨額に達して居つた。

けれども事實をいふと、何事によらず本當に發展するには、決して消極的に引込んで居て、先方から來るのを待つてゐるといふ風では駄目である。それでは何時までたつても成功するものではない。棚から落ちる牡丹餅を、下から口をあけて待つて居るといふやうでは、其國も到底發展するものではない、欲しければ自ら進んで行つて、棚から牡丹餅を取り下ろして食ふやうな人間を養成しなければ駄目だ。獨逸が今日世界的に發展し活躍するのは、國民自らが斯う考へたからなのだ。かうして彼等は、遂に人の畑にまで鍬を入れるのもかまふことはないと考へたのである。そして此人の畑に鍬を入れ過ぎた結果として、歐洲大戰は起つて來たのである。

一二　日露戰爭に比べた歐洲大戰の狀況

それでは歐洲大戰に於て、獨逸の青年指導の結果が如何に現はれたか、私はそれについて述べなければならぬが、此處で一寸、歐洲大戰がどれ丈け大仕掛のものであつて、交戰諸國民がどれだけ努力を費して居り、其處に如何ばかり慘憺な狀態が見られ來つたかについて、先づ少しく述べて置くことが便利であらうと思ふ。

此まで、日露戰爭といへば、近代に於ける最大の戰爭として見られ、就中奉天の戰といへば、一地點に多數の兵力を集中したといふ點からも、世界に於ける軍事上の研究題目であつたが、其際に於ける兵力は幾らあつたかといふと、日本が十九師團で、露國が二十五師團、而して正面戰線の長さは三十五里しかなかつた。ところが歐洲大戰に關する昨年夏頃の統計に見ると、西の方面卽英佛軍と獨逸

軍が對抗して居る方面の兵力は、兩方合して三百五十二個師團で、戰線の長さは百七十里に及んでゐた。東方卽露國方面の兵力は兩方合して三百四十一個師團、そして戰線の長さは四百二十里に達してゐた。又南方墺地利と伊太利方面の兵力は兩方を合して百二十個師團、其戰線は百十里に亘つてゐた。其他に土耳古方面に三十三個師團と、巴爾幹方面に二十六個師團の兵力がある。卽ち東西南三方七百里に亘つて、相對抗せる總兵力は殆んど九百四十四個師團の多きに及んでゐた。そして今日では、米國も既に二十萬以上の兵を送つてゐる。

かういふ大仕掛の戰であるから、從つて之に費さるゝ戰費も亦莫大なもので、昨年六月中旬頃の統計に見ても、聯合軍の方丈け合計して、最初から千三百三十九億圓の多額に達し、一日の戰費が合計して一億七千五百二十萬圓である。そして最多いのは英國の戰費で、一日の額が八千萬圓に及んで居る。獨墺國の方はこれまでの戰費總額が五百八十五億に及び、最低の一日の戰費が六千六百四十萬圓である。要するに此が開戰後三年間の大凡の總戰費であるが、之を日露戰爭に於ける日本の戰費十九億餘圓、露國の戰費二十三億圓に比べると、殆んど比較にならぬ位である。

更に一歩を進めて、此當時に於ける各交戰國の男子の數と動員數とを比較して見たい。先づ露國の人口中男子は八千八百四十萬にして、當時までに召集された人員は千六百五十萬ある。佛國の男子は千九百六十萬で、召集されたものが六百九十萬ある。英國の男子は二千二百萬にして、其中召集されたものは五百九十萬に達して居る。又伊太利は男子の人口が千七百萬で、三百八十五萬が召集されて居る。それから敵國たる同盟側の方はどうであるかといふと、獨逸の男子三千三百五十萬中、召集されたものは八百八十七萬に及んで居る。墺地利の人口二千五百四十萬中、召集されたものは千二百三十萬、墺地利の人口二千五百四十萬中、

是によつて見ると、聯合國の方は、米國を除き日本を加へて、男子の總人口一

億六千萬であるが、其男子の人口の約五分の一は、戰爭に從事し、佛國の如きは、千九百六十萬に對して七百萬であるから、勿論三分の一以上出征し、男子の總人口七千五百萬である所の、同盟側の方も、亦其三分の一强が、既に召集されて居る割合である。生れたばかりの赤ん坊でも、八十歳の老人でも、矢張男子であるとすれば、それ等まで引くるめて三分の一强の召集とは、自分の體が意の如く動かせるものは悉く從軍して居ると見ていゝ位である。

そして此等の從軍者の死傷の割合はどうであるかと見ると、先づ露國の死傷者が昨年夏頃迄に六百五十萬、捕虜となつたものが二百八萬に及んで居た。佛國のは死傷者が三百八十五萬で、捕虜が三十八萬、英國の死傷者は百七十五萬、伊太利の死傷は七十萬に及んでゐる。それから獨逸は四百十七萬の死傷者と、四十五萬の捕虜を出し、墺地利は三百二十萬の死傷者と、百二十二萬の捕虜を出してゐる。

此處で一寸再び日露戰爭のことを考へて見たい。あの當時日本の人口は五千萬といつて居た。半分を男子として、その二千五百萬の中、當時人夫まで一所にして陸海軍の給與を受けた者が約百萬あつた。そして病死者を除いて、死傷者は十八萬餘に過ぎなかつた。又旅順の戰爭といへば、如何にも凄慘を極めたもので、あの方面に向ふものは、召集當時から生きて還ることは出來ないものと思つて居た。それで居て死傷者は三萬位のものであつた。けれども其結果は關東州の九十九年の租借に終つて居る。處が獨逸がヴエルダンを攻擊した際の損害は、實に四十萬の上に出で、而もそれが多く青年の一團であつた。それでゐて獨逸は此犧牲に對して得る所は何もなかつた。それにも係らず、獨逸は猶依然として平氣で戰爭を繼續し來つて居る。最初から堅忍不拔の氣象を維持して居るばかりでなく、敵ながら天晴と思はしむるまでな態度を取り來つて居る。之を百萬の從軍者を出し、十八萬餘の死傷者を出して蒼くなり、間もなく戰に倦んで、或は戰爭中止の必要を叫んだ地方もあるといふ日露戰爭當時の我國の狀態に比すると、聊か人を

して一考させるに足るものがあると思ふ。

一三　獨逸の國民皆兵の實現と民心統一の原因

處が開戰後に於ける獨逸國内の有樣はどうであるかといふと、最初からいふと、召集した兵數は前にも述べたやうに少くも千二百三十萬人に及んでゐる。勿論負傷者が快復しては出た數も此中に加はつてゐるのであるが、兎に角最初から軍務に從事してゐる數は一千萬人以上あることは確實である。一千萬以上といふと、獨逸の全人口が六千七百萬許りだから其半數の三千三百五十萬人が、老人から赤ん坊まで合せた男子として、大凡男子の三分の一以上は皆戰爭に從事してゐるといへるのである。そして此中には既に十七歳の青年も含まれてゐるといふ風であ

るから、立派な體をもつたものは、殆んど皆戰に出てゐるといつていゝのである。いや男子ばかりではなく、男子の丈夫なものが戰場に立つてしまつてからは、職工とか電車や汽車の運轉手といふやうな、婦人で代り得べき色々な職業には、大抵皆婦人が代りて働き、鐵道從業の婦人は二萬五千を超え、軍需品製造に從事してゐる婦人は二百八十三萬からに及んでゐるのである。其他老人といつても、役に立つものは皆各種の職業に從事して、糧食だの武器だの、生産に努力し、本當に國民皆兵といふことが、文字通りに實現されて居るのである。卽ち我國と同じく、凡ての階級や職業の如何を問はず、國民が皆兵役に服すべきことゝなつて居る獨逸に於ては、歐洲大戰には、それが議論でなくして實際に行はれたのである。そして百三十四種からの色々の人種から成つて、國民思想や軍隊の編成が不統一なるが爲に、比較的弱い國である墺地利を支へるばかりか、土耳古二百萬の軍隊は、獨逸將校が指揮する、兵器も彈藥も供給してやる、といふ風にして、能

く味方よりも二百五十萬餘りも多い聯合軍に對抗するどころか、動もすれば攻勢を執つて行く。そして直きに糧食に窮するだらうと云はれて居ながら、別にそれほど糧食に窮した模樣も見せない。寧ろ敵ながら絶えず感心せしめる態度に出てゐるのである。それは何故であらうか。

いふまでもなく獨逸が戰時の戰に先つて、よく平時の戰に努力して居たからである。例へば糧食の點から見ても、戰爭が始まると、獨逸と云ふ國は動もすれば封鎖され易い地位に在る、封鎖されると直ぐに糧食に困らなければならぬ。だから今から其考をしてかゝらねばならぬといふ處から、戰爭前に於て生理學の上からも糧食の事を充分に研究して居つたのである。卽ち人間が食ふべき一定量を學問の上から割出して、之を實地に應用する一方に、學問を利用して種々の代用品を得るといふ方法をも研究して居たのである。かうして獨逸に於ては軍隊が非常に强いばかりでなく、學問も優れて居る、工業の力も著しく進んでゐる、

農業も立派に發達してゐるといふ風に、兵力ばかりでなく、其他の萬事が立派に進歩して居たのである。云ひかへれば、國の兵備といふものは、軍隊や艦隊の力ばかりでなく、工業も農業も學問も國の兵備であるといふことがよく國民の間に理解され、國民の事業總てが國防であつて、國民皆兵といふ本當の意義が十分に飲み込まれて居たと見なければならぬ。

いな〳〵、そればかりではない。開戰以來獨逸が敵ながら感心の態度に出ることが出來たといふのは、以上述べ來つた外に、一つの大きな理由があるのである。それは何であるかといふと、國民の心が益統一せられ、國民の意氣が益振ひ來つたことである。云ひかへれば愛國心が旺盛であつて、國內が益々結束せられ、國民全體が斃れるまで續けるといふ決心が堅いからである。これはまた何によつて得られたのであるかといふと、畢竟獨逸青年團の努力の賜である。是までの青年指導の仕方が十分に行き屈いて居たが爲である。協同服從規律の精神が青

年の間に立派に養成せられ來り、獨逸と云ふ國に取つて、最も大切なものである所謂獨逸魂といふものが見事に鍛練され、國家の危難に際してピクともせぬといふ確固たる國民性が作り上げられて居たが爲であると思はれる。」

一四　大戰に於ける獨逸の青年指導法

それでは獨逸に於ては、開戰以來青年の指導について、如何なる方法を執り來つたか、吾々は今此について少じく知る必要があらうと思ふ。

さて前にも述べたが如く、フオン・デル・ゴルツ元帥を部長とする青年獨逸團は、千九百十二年五月獨逸皇帝の勅許を經て獨逸皇太子を總裁としたのであるが、要するに此青年獨逸團は、從來獨逸國內に設けられてゐた色々の青年團體を聯合し、全國內に此事業を擴張したもので、其目的とする所は、少年の體力及び精神を健全にし、愛國心の强い剛健な獨逸國民を作らうとするに在り、會としては只此目的に從ひ、一般教育の主義方針を統一し、細かい點はこれまで通り各團體の習慣に從ひ、地方の狀況に合はせるやうにして、成るべく之に干涉しない主義を取り、專ら良民を作ることを心掛け、佛國の青年指導法のやうに、決して軍事的豫備教育を施す方針を採つては居なかつたのである。けれども、開戰後に於ては、陸軍當局は大に兵力を增さんことを企てた一方に於て、兵員の損失の甚だ大なるべきことを豫想し、國內の青年に對して、入隊前に於て、軍事豫備教育を施すことが極めて必要であることを考へ、卽ち青年の指導教育を陸軍の手で引受け、陸軍大臣の示した一定の教育標準に從つて、全國の青年に純然たる軍事教育を施すことゝなつたのである。そして普國にては一九一四年八月二十六日附で、陸軍文部內務の三大臣が連署して、青年の軍事豫備教育に關し、「我が國民各自の能力及び獻

自的精神が大に發揮されなければならぬ時機が來たについては、十六歳以上徴兵適齢に至るまでの青年も、必要の場合には其體力に應じて、軍事上の補助勤務及勞働に從事せしめる必要あるばかりでなく、他日兵役に服する場合を考へると、今日其青年に對して特別の軍事豫備教育を施すことは極めて大切な義務と心得なければならぬ。そして各官廳は、之に對しては努めて便宜を與へるばかりでなく、其發展に助力すべく、又此迄既に青年教育に盡して居るものは、在來の方法で此事業に從ふばかりでなく、更に同志の人を勸誘して大に此事業の發展に努力せんことを望む』といふ布告を發し、同時に陸軍大臣は、此軍事豫備教育の標準として、次の要旨を示したのであつた。

十六歳以上の青年中、義勇兵を志願して採用されなかつたものが少くなかつたが、此等の青年に對しては、武器を携帶しないで行ひ得る範圍にて、軍務の豫習を行はせ、それには、殊に愛國心を皷吹し、剛毅勇敢な氣象と決斷力を養ふことを主とし、今日、祖國が危急の狀態に在ることを說いて、祖國、皇帝及國家に對する犧牲的精神を振はしめることが必要である。此戰爭に勝たなければ獨逸は全く滅亡するのであるから、如何にしても勝利を占める爲に、吾々は努力しなければならぬことを、十分に青年に理解せしめなければならぬ、それについては青年に課すべき演習の種類は概ね左の諸科目を適當とする。

一、迅速に且靜肅に簡單な隊形（橫隊若しくは分隊縱隊）を組成すること、此際隊部を小隊及分隊に區分するは步兵中隊に於けると同樣である。

二、上の隊形を解散し、又迅速に靜肅に再び同じ隊形に集合すること、此際各自をして方向及接觸を正確に保たしむることが必要である。

三、號令及び記號によつて、分隊縱隊の簡單な運動を行ふこと。

四、行軍演習を行ひ、その步度及び速度に關する規則を敎へ、步幅を大ならしめ、演習場への往復行軍は、此目的に使用し、漸次に其距離を延して、行軍力

の增進を圖ること。

五、右の機會を利用して地形に關する教育を行ふこと。

六、散兵線の成形や、分隊及び小隊の野外運動を行ひ、屢々不意に集合の演習を行ふこと。

七、青年部隊の各種運動は、操典の規則を嚴守せしむるよりも、寧ろ活氣に充ちて、快活の感を起さしむることを主眼とすべきも、指揮官の號令及命令に對しては嚴正なる服從を要求すべし。迅速な答、及び、名を呼ばれた者が直に列外に出づることは教育するを必要とする。

八、地形に關する簡單な研究、戰鬪に於ける地形の意義及び利用法、殊に今日の武器に關して簡單な說明をなすべし。

九、目標を認める準備として、微細な地物をも指示して行ふ地形の解說。

一〇、各種の觀察演習。

一一、距離測量。

一二、同一種類の物體を迅速に測定し計算すること。

一三、觀察した事を報告する豫習として記憶の演習。

一四、聽取演習。

一五、野外でした視察から正當な判斷をすること。

一六、觀察した事項を正確綿密に報告すること。

一七、短簡な命令を正確に傳達すること。

一八、野外に於ける嚮導。

一九、時計磁石電話並にモールス式電信符號に關する智識。

二〇、地圖の利用。

二一、信號。

二二、壁及び樹木などへ攀ぢ登ること。

二三、單簡な補助作業卽ち繩結び、浮標、筏、舟橋及び道路などの構築、監視や、哨所の築造や、各種の渡河設備や、其他天幕の設備や小屋、野竈の築造、炊事や野營の設備などの補助。

二四、擔架の組立及負傷者の救急。

二五、掩護及び敵に近接の爲地形の利用。

二六、散兵線を以てする地形の利用及び散兵壕の構築。

二七、掩蔽物よりの前進並に掩護物への退却。

二八、兩部隊對抗して簡單な任務の遂行。

二九、前哨勤務の說明及び前哨の配置。

三〇、以上の諸演習を實施する場合には、青年をして傳令、連絡、步哨及び偵察勤務等の獨立任務に服せしめ、獨立心義務心及び自信力を養成するに努むるを要する。

三一、青年の意志を鍛練し、忍耐力を養成する爲には、有ゆる手段を用ふべく、一旦引受けた任務は必ず之を遂行し、中途に之を放棄することを許してはならぬ。

三二、徒手體操、器械體操、駈步演習及簡單な競技等による純粹の敎育は、これまで實施された青年獨逸團の演習に準じ、それも一回に長時間行ふよりは、寧ろ其回數を增加する方が宜しい。

三三、夜間には野外勤務、監視勤務及宿營勤務に關する簡單な學理上の敎育をなし、又父祖の偉勳を說いて青年に深き印象を與へ、戰報を傳へると同時に、殊に東方に於て、獨逸國內に進入し、村落を燒いたり、住民を逐うたり又は殺したりした敵に對しては、敵愾心を盛ならしむるやうにすべきである。

以上の達示と同時に、陸軍省は、青年團に加はり、軍事豫備敎育を受けるのは、凡て强制的にしないで、全く各自の志望に從はせると共に、其兩親や後見者の關

係してゐる政黨や政派によつて區別をつけぬことを嚴重に戒めたのであつた。

普國の此の方針を認めた獨逸の各聯邦は、直ちに皆普國に倣つて同樣の態度をとつたのであるが、時局の重大なことを自覺した一般國民の熱烈な愛國心と犧牲心とは、少年の好奇心と競爭心と相俟つて、愈青年團を勃興せしめ、學校生徒や十六歲以下の少年までも之に加はり。軍事豫備敎育は全國到る處で盛に行はれるに至つたのである。

處が、獨逸では、此迄社會の階級と宗敎の異るにつれて、兎角一致を缺く弊風があつたが、政府は此大戰爭によつて、一般の同心が大に結合に傾いた好機會を利用し、先づ青年の敎育から始めて此弊風を除き、愈全國民の團結を堅うし、國軍の基礎を固め、併せて青年軍事敎育の實施を易からしめやうといふ考へから、地方每に各階級や各宗派の者大凡百人を混じて一個の青年中隊を編成させ、中隊長には多く補充隊將校などを充て、諸中隊は各軍團長の下に屬することゝし、一九一五年秋には伯林附近で其大演習さへ行つたのである。

此の如き青年の敎育と共に、各留守軍團長は、それ〳〵一般青年保護の爲に必要と認める規定を設けたのであつたが、中には十七歲以下の青年は、兩親か、其他の監督者と一所でなければ、酒店珈琲店は勿論、自働飲食店、料理店又は活動寫眞館などに入つてはならぬ。又冬は午後八時後、夏は午後九時後は、街上を迂路附いてはならぬ、又決して喫煙してもならぬ、彼等に煙草を賣つた者も處罰することゝしたものもあつたのである。

かうした青年の軍事豫備敎育に對する社會一般の意向は、最初は戰時だから已むを得ないとして之を迎へたに過ぎなかつたが、時がたつと共に、此事業が進むにつれて、獨り軍事上ばかりでなく、一般青年薰陶の爲にも、頗る有益であることを漸く認めるやうになつたのである。けれども此軍事豫備敎育は、各自の自由意志に委せてあるが爲に、未だ獨逸青年の五分の一が此敎育を受くるに過ぎず、

他の五分の四は全く青年團に關係して居ないといふ有樣である。是に於てか、國家の大勢を察することの出來ない青年及び無智の父兄に訴へて居た丈けでは、迚も好成績は上らぬし、又今日迄の經驗では、利己心に富んだ備主中には自分の使つてゐる青年が青年團に入ることを好まないものもあるから、どうしても法律を設けて强制的に此教育を實施する必要があることが盛に唱へられるに至つたのである。

一五　大戰中獨逸青年活動の狀況

さらば歐洲戰爭に際して、獨逸青年は如何なる態度をとり、直接間接に戰爭の行動にどれ丈の援助をしたかといふと、先づ最初獨逸が動員を行ふと同時に、各種の學校や青年團管理者等の熱心な指導と青年自らの熱烈な愛國心との爲に、多數の青年は爭つて國難に當らんことを志願し、而も其熱心の餘りに秩序も何もなく、或は書面で、或は電話で、或は直接高官に面會を求めるといふ風で、却つて軍務を煩はすこと少くなかつた有樣である。政府は卽ち此等の志願者に對して、一時其時期を待つべきことを訓し、やがて各種志願兵の用途及び採用法を定めて一般に示し、既に開戰後一ヶ月以內に於て、二百萬の志願兵を得たのであつて、最初から計劃以上の人員を得た當局は、之と同時に當分申込を受附けないことを告知したといふことは、頗る注目すべきことであると思ふ。而して此等の青年中、軍務の補助を志願したものゝ多くは、國內の警戒勤務や警察の補助に使用せられたのであつたが、戰場に近い方面にては、直接軍隊に對する補助勤務に使用されて、鐵十字勳章を貰つた青年さへあり、また動員令の發せらるゝと同時に、全國の青年團は悉く立つて交通線の防護に從事し或は學業の餘暇郵便電信等の無給配達

に從つたのであつた。

それから食糧といふことは、戰爭に於ける最も重大な問題の一つである所から、此方面に使はれた青年も頗る多く、中には最初は主として青年團に屬して居る者のみによりて、青年農事補助隊といふやうなものが出來た處もあつたが、戰爭の二年目になると、小學校生徒も此農事補助隊に加へられることゝなり、各學校は競うて校庭に畑を作り、教師指導の下に、兒童に馬鈴薯や豆などを植えさせ、一粒の麥一寸の藁も粗末にすべからざることを訓誨したのであつた。それからまた、出征軍人の留守宅に行つて、收穫の手助をするとか、栽培したものから得た收穫は金に代へて、赤十字其他の救恤金に充てるとかいふやうなことが盛に行はれ、其他に、團體として出征軍隊の出發を見送り、停車場内で輸送軍隊に湯茶などの供給や、其他の使役に服するとかすることも常に行はれて、出征軍人の精神を刺戟し志氣を鼓舞し、それが國軍に與へた効果は少くないといはれて居る。

一六　列國青年活動の狀況と其指導

獨逸の青年が戰時に於て如何に指導され、又如何に活動しつゝあるかは既に述べた如くであるが、其他の交戰國の青年と雖も、皆此好機會を利用して獨逸に劣らぬ程の活動をなしつゝあるのである、就中英國青年の活動としては次のやうなのが其主なるものだと云はれて居る。

一、各地の住民に告示を傳へること、及び、宿割、徵發、警戒などの務。

二、通信騎手や信號手として働く外に、無線電信などによりて通信を怠らざること。

三、敵の斥候の破壞を豫防する爲、橋梁、排水渠、電信線などを常に偵察して護衛すること。

四、利用し得べき糧食の運搬などに關する情報を集むること。

五、各地の住民間に組織だつた救恤手段を講ずること。
六、國家の防禦に從つて居る人々の家族又は病者負傷者を救助すること。
七、少年隊の倶樂部室内に、應急手當所、假繃帶所、又は看護所、救護所、調劑所、スープ施與所などを設くること。
八、案内者や傳令などの役を務むること。
九、飛行機から投下する通信を傳へること。
一〇、河口及港灣を警衛し、船舶を案内したり、海岸防禦を助くる少年義勇隊の役を務むること。

此外に赤十字事業を助けたり、農業の補助をしたり、直接間接に戰爭の爲に働いて居ることは、英國ばかりでなく、佛國や露國にても同樣で、殊に佛國にては、凡ての青年は平生から軍事的訓線をされて居るので、中には戰線に出て活動して居るものも少くないやうである。米國に於ても、參戰以來此國の青年や少年が活

動して居ることは驚くべきもので、或は二百萬の小農園を設けて食物產出の增加に助力し、或は少年豚クラブを設けるなど、此國の青少年が食物の貯藏と供給と農產製造に助力し來つたことは目覺しいやうである。

かくの如く、各交戰諸國に於ては、今日の機會を利用して、青年をして種々の活動をなさしめつゝある一方に於て、彼等をして將來の健實なる國民たらしめるといふことには、獨逸と同じく亦熱心に努力しつゝあるのである、卽ち戰爭は兎に角何時かは終りを告げるに決まつて居る。戰爭が濟んだ後では、先づ其慘狀を恢復して、出來る丈け早く損害を補償することに努力しなければならぬ。と同時に、更に再び起らないでは止まぬ一層大なる戰爭と、大なる競爭の爲に準備することを忘れてはならぬ。之が爲めに既に今から其準備をして置かなければならぬ。其準備の第一步は、云ふまでもなく、今日の少年や青年を、立派に敎育し指導して、やがて國家の運命を擔つて立つべき優越なる國民に仕上ることであるといふ

考へから、各交戰國の敎育家等は、盛に小國民に對して愛國心の注入に心掛け、之が敎養に熱中して、之が爲には、或程度までは强制的の指導法さへとつてゐるのである。

例へば英國の如きは、此まで十三歲までゝあつた義務敎育の終を、近頃十四歲まで引延ばさうとし、それから更に十八歲までの青年に對しては、既に强制的に補習敎育を實行するに至つたのである。尤も其補習敎育といふのは、單に學問ばかりでなく、體力や思想や德義心などにも重きを置いて、健全の國民を作らうとするのであるが、戰時に於ては勞力の必要上、二人宛の青年で組を作らせ、今日一人が補習學校に行けば、一人は家に在つて勞役に服き、明日は他の一人が學校へ行つて、前の一人が勞役に服するといふ風にして、二人の中一人は每日學校へ出席せしめて居るのである。又彼の前にも述べたやうに、獨逸に於ては、青年が冬季は夜八時後、夏は九時後は、青年の單獨外出を禁じ、若しくは彼等の仕度所である飲食店などに獨りで出入させないやうにしてゐるといふが如きも、青年に對して强制的指導の方法が、諸方に於て行はれてゐることを示すものである。

つまり今日の交戰諸國は、戰爭に對して必死の狀態に在る一方に於て、戰後に於て必然起るべき國民間の大競爭大奮鬪場裡に於て、國家復興の事業に當るべき青年を、如何にして優越なる國民となし得べきかについて、日夜思を凝らし、其方法手段について專ら心を痛めて居るといふ有樣である。

一七　日本の青年指導に對する不安心

以上述べた如く、歐米の交戰諸國は、猶ほ戰爭最中であるに係らず、既に戰後の國運を背負つて立つべき青年の指導に專心しつゝある上に、大戰後に於ける世

界の競爭舞臺が東洋であつて、然かも日本の競爭者である國が、大戰中に於て、絶えず侮るべからざる勢力を示して來た獨逸であるとするならば、今日の日本に於ける青年の指導といふことは頗る重大なことであつて、吾々青年の指導者たるものは、今から最早十分の覺悟をすると同時に、それ相當の手段なり方法なりを講じて置かなければならぬではなからうか。

成程日本人には日本魂がある。どんなことがあつても戰に負けることはないといふものがあらう。けれども佛人には佛國魂があり、英人には英國魂があり、獨逸人には獨逸魂があり、殊に獨逸人の獨逸魂は、決して馬鹿にはならぬものである。佛國が精兵を以て硬めたヴエルダンの要塞に、四十萬の青年の肉彈を打附けたのも獨逸魂である。墺地利の兵が容易に露國に降參するに方つて、中に交つた獨逸兵はなか〳〵降參する處か、數ケ所の傷を受けながら、決して捕虜となることを肯んじないで、遂に將校の號令の下に、銘々手に握つた爆彈を投げて自ら花と散つたといふのも獨逸魂である。所謂獨逸魂なるものは、なか〳〵侮るべからざる一個の大勢力である。

由來日本といふ國は、陛下の御稜威によつて多幸多福な國である。天祐の深い國である。日清戰爭についでは北清の役、ついでは日露戰爭、日獨戰爭と、戰へば必ず勝ち來つた。日露戰爭の爲に蒙つた二十億の國債は、其償却に就て有識者の間に青い息を吐かせて居たが、歐洲大戰は思はぬ金を日本の財布に舞込ませることゝなつた。正貨準備も何時か十二億に達した。經濟狀態は濡手で粟を攫んだ有樣になつた。ところがかういふ今日の狀態は、日本の將來に對して、どこまでも幸福を齎らすものであらうか。知らず識らずの中に、青年の思想を墮落せしめては居ないが、體格を弱からしめてはゐないか、日本魂の琢磨に手入れが缺けてはゐないか。知らぬ間に日本魂に錆が入つてゐるといふやうなことはないか。目前の利益、目前の事業、といふやうなことばかりに熱中して、國家永遠の根底を

爲すべき國民道德の修養、國民精神の鍛練といふ大問題が閑却されてはゐないか。來るべき日本の大競爭者に對して、立派に對抗して見事な勝利を得ることが出來るやうに、日本の青年は十分な指導の下に置かれて居るだらうか。これが私の主として不安に堪えない點である。

今日日本の青年の體格を見ても、二三年來多少は善い傾が見えて居るが、之とても決して十分といふことは出來ぬ。まだ向上の餘地は甚だ多いことゝ思ふ。殊に昨年の徵兵檢査の結果に見ると、花柳病の甚しく增加して居るといふことは、頗る遺憾なことである。此花柳病に惱んで居る青年が、戰後の活舞臺を皆負つて立つのかと思ふと、何だか心細い感も起るのである。殊に今後に於ける世界の活舞臺が、東洋而も我隣國の支那であり、其支那は云はゞ今後の日本の原料の國であつて、日本にとつては最も大事な國であるから、獨逸が背負つて立つてゐる墺地利の如く、日本が將來相依り、相輔けて行かねばならぬ國であることを思

ふと、かう云ふ大事業が、花柳病の殖えるやうな國民で十分に背負つて行けるか、そして今後の大競爭に於て日本が立派な勝利を得られるかどうかは頗る疑問であるやうな感があるのである。それに精神的の方面からいふても、青年の思想や風儀を害するやうな出版物が、近時甚だ澤山に公にされて居る。それから活動寫眞などでも、心あるものが殆んど正視するに堪えないやうなものを、學校の制帽をかぶつた者が平氣で見てゐる。甚しきに至つては、親達までが子供と一處にそれを見て居るといふ風では、國民の風儀と共に國民の意氣や元氣といふものが、自然に消磨しはしないかと危ぶまれてならないのである。私は今日の青年指導者は此處に十分に注意する必要があるであらうと思ふ。實際またそれが注意されて居るにしても、今日の態度はそれがまだ緩慢に過ぎはしないか。換言すれば其注意すべきことが十分に徹底して居ないではないかと思ふのである。然らばどうすればよいだらうか。私は卽ちそれを述べるに先つて、更に歐洲大戰が與へた敎訓

の大要について述べる必要があらうと思ふ。

一八　歐洲大戰の與へた事實的教訓

歐洲戰爭が吾々に敎へたところの第一は、今後の戰爭といふものは、これまでと異つて、單に軍隊と軍隊、軍艦と軍艦との戰といふやうなものでなく、國民全體の戰爭であるといふことである。軍隊や軍艦は只戰爭の火蓋を切る丈けである。一旦火蓋が切られてから後は、もう國民全體の戰爭である。軍隊が活動する、軍艦が活躍する、それ丈けを以て戰爭だと思つて居ては大なる間違である。國民の凡てが有らん限りの體力と能力と、財力をしぼつて、最後まで戰ふのが此からの戰である。

現に歐洲戰爭の例に見ても、交戰國の國民であつて、戰爭に關係して居ないものは唯の一人もないといつてよい程である。戰線に立つてゐるものは固よりのこと、其他のものでも皆直接間接に戰爭に關係して居るのである。獨逸のやうな國民全體の勞力を徵發する制度を設けた所はいふ迄もないが、英國の如きすら、强制的ではないが、戰爭に直接關係のない、戰時に不必要な產業に吸收されてゐる勞力は、悉く之を徵發して戰爭に直接關係のある方面に向はせるといふ政策を採つて居り、國民の財力は盛に徵發されて、老人や赤ん坊までが、食物の量を減し質を惡くして、飢餓を忍びつゝも、愛する祖國の爲に戰を續けて居るといふ風であるから、交戰國の國民は、一人として戰爭に加はらないものはないといつていゝ筈である。

從つて事實に於て明白にされたのは、國民皆兵といふことである。獨逸に於ては勿論のこと、佛國に於ても英國に於ても、此事實は可成明白に示され、兎も角

も自ら自由に身を動かし得るものは、老幼を問はないで、直接若しくは間接に軍務に從ひ、青年も少年も、軍事又は農工業などの補助を勤め、婦人も亦各種の勞働に從事して、出征せる男子に代つて努力し、國民皆兵といふことは決して理論的の空想にあらずして、立派な事實であることが證據立てられ、之を廣義に解する時は、其事實は婦人にまでも及んで居るといふことが出來るのである。

第二には吾々は戰時の戰爭に勝たんが爲には、先づ平時に於て充分の準備をなし、所謂平時の戰爭に於て立派に勝たなければ、決して戰時の戰爭に勝てるものでないといふことを痛切に敎へられたのである、而かもそれが理論にあらずして實例によりて明示されたのである。

例へば之を露國について見るに、露國の軍隊は、單に軍隊としては決して弱いことはない、攻勢的の性格に缺けて居るといふ丈けである。然るに獨逸の爲に遂にあんな酷い目に遇はされてしまつた。云ふまでもなく、それは國民精神の鍛練

が不十分であつたが爲に、間諜の爲に謀られた一方に、露國には工業上の準備といふものが殆んど缺けて居たからである。戰爭前までは、露國は兵器のやうなものまで、獨逸で半ば製造した品を輸入して、之に加工して使用するといふ憐むべき有樣であつた。だから露國は忽ちにして兵器彈藥に缺乏して、日本や米國等から供給を仰がなければならぬといふやうな狀態に陷つたのである。つまり露國は平時に於て、工業上獨逸から征服されて居て、獨立しては何事も出來ぬ狀態にあつたのである。露國が獨逸の爲に絕えず惱まされたのは當然でなければならぬ。

然らば平時の戰爭に勝つとはどういふことであるかといふと、云ふまでもなく工業を發展させ、農業を振はせ、商業を盛にし學問をも進步させ、智力上に於ても經濟上に於ても、其他各種の文明事業に於ても、優に他國民を壓倒することの出來るやうにするといふことである。蓋ふに一國の兵備といへば、軍隊や軍艦が其大部分を占めて居るには相違ないが、實をいふと、工業も國の兵備であり、農

業も國の威力であり、學問も亦國防の一部である。此等が十分に發達し進歩してゐなくては、軍隊や軍艦が幾ら強くても、又どれほど多くとも、立派に其働をすることが出來ないのであつて、やがて、戰時の戰爭に勝を得ることの出來ないのは自然の勢でなければならぬ。

第三に吾々が敎へられたことは、大戰爭が長く續くといふと、個人の財産と國家の財産との間には、殆んど差別がなくなるに至るといふことを忘れてはならぬことである。獨逸は昨年秋まで既に六回の國債を募つて居るが、其應募者は寧ろ回を重ぬる毎に增加して、第一回のが百二十萬人、第二回が二百七十萬人、第三回が四百萬人、第四回が五百三十萬人、第五回が五百八十萬人にして、第六回の應募者は、第一回のそれの五倍以上に及んで居る。卽ち人口の大凡五分の一が皆國債に應募するに至つたと云つてもいゝ位である。かういふ事實は明に國民の强固なる自信力と堅忍不拔なる態度と、見事に結束された愛國心とを示すと同時に、

個人の財産と國家の財力とが如何に接近しつゝあるか、云ひかへれば個人の財産が殆んど皆國家に提供されてゐることを示して餘あるものである。卽ち今後の戰爭に於ては、國民は體力と能力と元氣と根氣の有らん限り奮鬪すると同時に、財力のあらん限り戰ふべきものであることが力强く語られて居るのである。

此一面に於て、第四に、吾々はまた個人の幸福と國家の隆盛との間に、どれ丈け密接な關係があるものであるかといふことを、極めて明白に敎へられて居る。例へば白耳義や塞爾維や黑山國は、開戰後如何に憐むべき狀態に陷つたか、國土は敵の爲に蹂躙され、國王は他國に走り、軍隊は他國の軍隊と共に、漸く戰を續けて居る。殊に白耳義の如きは、大戰以前に於ては、歐洲中最も幸福なる國だ、願くは白耳義に行つて住みたいと云ふまでに、歐洲諸國民によりて羨まれてゐた國ではないか、其國民は戰爭中如何な狀態にあつたか、財産も沒收せられ、有ゆる權利も自由も奪はれてしまつて、多くは敵國の奴隷として、命がけで働かされ

てゐるといふではないか。佛國の領土に於ても、獨逸の爲に占領されて居る地方には、樹本一本もなく、婦人子供まで悉く獨逸人が浚つて行つて使役してゐるといふではないか。之によつて見ても、國が悲慘な狀態に陷り、衰亡に傾くといふと、其處に個人の幸福といふものは全然存在しなくなるといふことが事實上明白に分つたのである。云ひかへれば健全な國家が存在して居つて、初めて個人の幸福があることが明にされ、個人と國家といふものゝ關係、所謂個人主義と國家主義といふものゝ調和が、如何なる點に於て存するかといふことが、各國の國民に十分に了解されたのである。つまり國家の危機に際しては、個人の幸福は之を犧牲にして、國家の危急を救ふといふことが、結局個人の幸福を增進するの路であるといふことが分つたのである。獨逸國民が愈〻國家的に結合して益〻奮鬪し、絶えず攻勢的態度を續けて來たといふのも之が爲である。盛に自由を叫び、同盟罷業を繰返し、平時僅に六師團を有するに過ぎないで、容易に徵兵制度を布

き得るとも思はれなかつた英國に於て、立派に徵兵令が布かれ、八十五個師團五百九十萬の兵が戰地に送られたのも之が爲である。共和政體である佛國の國民が、獨逸と同じく自分の財產と身體と能力との總てを國家に提供して努力して來たのも之が爲である。

之と同時に吾々が大戰によつて學んだことは、平素から國民の精神的鍛錬が足らなかつたり、青年の敎養指導に手遲れをしたりした國民は、國家の危急存亡の時に方りても、猶ほ國民的統一を見ることが出來ないで、結局悲慘な運命に陷らなければならぬといふことである。氣の毒な露國は如何な有樣であるかといふと、國內は紛糾に紛糾を重ねて、國家は殆んど無秩序な狀態になつてゐる、これは抑どうして起つたのであるかといふと、皆獨逸人の爲に誤られたのである。獨逸の間諜等が無智無敎育な露國民を煽動して、宛から操り人形でも操つてゐるがやうにして斯の如くしたのである。云ふまでもなく、これ露國に於ては青年の指導と

いふことが未だ十分に行屆いて居らず、協同服從規律といふやうな德義心が未だ國民の頭に十分につぎ込まれず、從つて愛國心が立派に發揮されず、自然と國民の統一といふことが行はれてゐないが爲に、敵をして其虛に乘ぜしめたのであることは云ふまでもなからう。之に反して獨逸の如きは、青年の指導が十分に行屆いて居るが爲に、戰爭が長引くに從つて却つて獨逸魂が愈〻發揮され、國民の統一が頗る見事に行はれてゐるのは、既に度々述べた如くである。

最後に吾々が大戰によつて敎へられたことは、今後の國民は、飽くまで經濟上に於て自給的に獨立を完ふするやうにならなければならぬといふことである。卽ち凡ての品物の供給を他國に仰がないで、自ら作りあげて自ら供給することが出來るやうな國にならなければならぬといふことである。外國の製品を引當にしないで、自らの供給によつて立派に立つて行けるやうに、平生から劃策をして置かなければならぬといふことである。いざ藥の供給がなくなつた、鐵の供給が止まつたといつても、驚かないやうな國になつて置く必要があるといふことである。

云ふまでもなく、英國は金力に於ても商工業に於ても、世界に優れた國である。それが獨逸の潛航艇の爲に何故苦んでゐるかといふと、これまで商工業の發達にばかり餘りに重きを置き過ぎたが爲に、農民は農業をすて、金の多く儲かる商、工業の方へ盛に赴いてしまつた。其結果、嘗ては總人口の六割四分を占めて居た農民は、今日では二割三分に減じて、國內で出來る食糧は、全體の需要の三分の一に過ぎず、國民の食料の約三分の二は之を他國から輸入せねばならぬ。それでなければ英國民は餓死しなければならぬのである。獨逸が潛航艇戰を開始したのは、卽ち英國を兵糧攻にせんとしたのである。自給の原則を沒却してゐた英國は、流石に此には弱つたと見へて、爾來盛に國內の荒蕪地の開墾に着手し、女子供までが總出で働いてゐるが、猶昨年秋以後に於て百五十萬町歩の耕作地を開墾しなければ自活の安心が出來ぬといつて苦心して居たのである。之れ英國が自給とい

ふことを原則とせずして、金さへあれば食物は外國から取寄せるといふやうな考で居たが爲であることはいふまでもない。

英國と反對に、獨逸が採つた態度は又學ぶに足るものではなからうか。獨逸は開戰以來、今に飢えるだらう！〳〵と云はれて居たに係らず、三年餘も過ぎて猶飢えて居る樣子はない。それは何故と問ふまでもない。商工業を盛にすると共に自給の原則に立てて、農業をも盛にしたからである。食物の減ずることを豫想して、種々の代用品の發明發見に頭を費したからである。之に反して露國は既に度々逃べたやうに工業上に於て殆んど全く自給の原則を忘れて居た。軍需品其他の大工場の如きは、大抵皆獨逸人の經營といつてもい丶位である。戰爭が進むに從つて困つて來たのは當然のことである。

一九　今後の日本の地位と青年指導の根本精神

以上の如く見て來ると、吾々は日本を愈〻光輝ある國として盛えさせ、今後の戰爭に於て見事な勝利を得るが爲には、どうしても今日の青年や少年の敎育や指導に對して、出來る限りの力を盡さなければならぬのである。それに對して努力するといふことは、つまり日本を強くし、日本を發展させるといふことになるのである。けれども日本といふ國は歐米の諸國などとは、國の成立の趣きが根本に於て異つて居る。だから、吾々が日本の青年を指導して行く上に於ては、其處に日本獨特の方法がなければならない。諸外國に於ける青年指導の方法は、直ちに取つて之を其儘日本に應用することは出來ない。然らば如何なる根本精神を以てかゝらなければならぬか、此が卽ち私が語らうとする所の本旨なのである。

青年指導の第一に於て吾々が先づ心掛けなければならぬことは、日本の國が如

何にして成立ち、今日までそれが如何にして立派に無瑕の儘に維持し來られたかといふことに鑑み、此特異なる國體を維持し、此美はしき國家をして完全なる發達を遂げしむる爲に、なければならぬ善美なる國民精神によつて、國民思想の統一を計るといふことである。何故にさうであるか。

元來歐洲戰爭は、最初は單に兵器彈藥の戰爭であつたが、やがてはそれが經濟の戰爭となり、人員の戰爭となり、ついでは國をあげての國民と國民との戰爭となつた。國民全體の戰爭となると同時に、更に〳〵徹底的に其歩みを進めて、忍耐力と忍耐力との戰爭、意氣と意氣との戰といふことになり、結局國民思想の戰爭、國民性の戰爭、若しくは國民精神の戰爭といふことになつた。そして國民精神の鍛練の行き屆かない、國民思想の統一しない、國民性の强固でない國は、先づ第一に破綻を來すことゝなつた。其第一例となつたのが卽ち露國である。

露國は文明國中其國民教育に於て最も後れた國であつて、義務教育を受けて居るものゝ數が、學齡兒童百人中僅に二十人よりないといふ有樣である。從つて青年の指導といふことも未だ甚だ振はず、國民精神の鍛錬といふことは殆んど出來て居らず、國民思想の統一とか、國民性の强固といふやうなことは、思ひもよらぬ狀態に在つたのである。此間に在つて、獨逸は徐ろに露國の社會主義者等を操つて、露國の攪亂を謀らうとした。獨逸の此方法は巧に効を奏して、社會共產主義の思想は忽ち露國全土に蔓延し、露西亞の國內は四分五裂の有樣となり、いつになつたら治ることか、行末がどうなるかさへ暫くは想像もつかなくなつた。かうして獨逸は自分の思ひ通りに露國を攪亂し、露國の內部を靡爛させ、其處に巧に食糧其他の色々の戰爭材料の方面に資源を得て、これからそろ〳〵英佛軍に對して新に勢力を振はうとするに方りて、自國の國內には動もすれば同盟罷工が奔を吹き出して、少からずそれによつて惱まなければならぬといふやうな次第となつた。之れ獨逸の爲に國內を攪亂されて、殆んど手がつけられなくなつた露國は、

物質の力を以てしては到底獨逸をどうすることも出來ない所から、卽ち社會共產主義によりて、先づ墺地利に手を出し、ついで獨逸に向つて勢を延ばし、思想上の方面から、今度は却つて復讐的に獨逸の攪亂を計らうとするに至つたが爲である。云ひかへて見れば、獨逸は今や敵國を攪亂した同じ手によつて、更に自分の國を攪亂され樣とする危機に陷つたのである。之れ卽ち久しく堅固であつた獨逸の國民性に腐蝕が入り、見事に統一せる國民思想に一時罅が來たものと見なければならぬ。云ふまでもなく平素國民精神の鍛錬に手の行屆いた獨逸は、其後間もなく此危機を切ぬけて、一時動搖せんとした國民思想を一統することを得たが、聊かにても油斷をして居ると、いつ再び前と同じやうな危機に出遇はなければならぬとも限らぬことになつたのである。そして此形勢は今後何時如何に變化して、戰爭の進展は勿論のこと、世界の大勢が如何になりゆくかさへ到底豫言することは出來ない有樣となつた。殊に今日歐米諸國に於ては民主思想が荒れ狂ひつゝあり、既に吾が國に於ても、識者でありながら猶且つ此思想にかぶれんとするものが漸く芽をふきつゝある今日以後に於て、美はしい、君民の調和を以つて建國の基礎とする、世界に比類のない、立憲君主主義の我帝國に對して、かういふ風な色々の思想が、少からぬ影響を及ぼし、それが爲に我國民思想が動搖を來し、國民精神の上に罅が入るやうなことはないであらうか、とさへ危ふまれるに至つた。

蓋し米國大統領の宣言に現はれた民主主義の思想と云ひ、英國や佛國に現はれてゐる此種の思想と云ひ、結局は我國根本の國民精神と相容れないものであつて、我國は、其建國の大精神から見ても、此等の思想や主義に感化さるゝことなく、超然として其外に立たなければならぬ地位にあるのである。否此等の思想や主義に惑はされることなく、固有の國民精神を益發揮するといふことが、卽ち日本が愈發展し益强大になつて行くに最も大切な根本義であつて、之が爲には、一面に於て獨逸が將來日本の大競爭者であることを忘れてならぬことは云ふまで

もないが、又一面に於ては、今後の日本は我國體及日本固有の國民思想と相容れない思想を有する世界の各國に對抗して、どこまでも此等の思想に感化さるることを防がなければならぬ地位に在るのである。今日の日本は實に斯の如き覺悟を以て進まなければならぬ地位に立つことゝなつたのである。而も此點から云ふと日本は實際に於いて不利益な地位に在るのである。何故かといふと、歐米諸國は、歐洲大戰によつて、目のあたり色々な實物教育を受け、事實上に色々と鍛錬されたのであつたが、日本にとつてはそれが殆どないのである。それでゐて生きた實地教育を受けた全世界に對して、殆んど獨力で對抗しなければならぬといふ地位に立つて居るからである。ところで日本の現狀はどうであるかといふと、動もすると國民思想の統一が缺けかけて、國民精神の上に弛が來て、社會一般は贅澤になり浮華になつて、只々美しい夢でも見て居るやうな狀態にあるではないか。これで居て果して戰の後全世界を一手に引受けて、見事にそれに對抗してゆくといふことが出來るであらうか、茲に今日只今から絶大な努力と絶大な覺悟が入りはしないだらうか。

かういふ風に考へて來ると、吾々は、今日に於て、上に述べたやうな覺悟を十分に青年の頭に吹き込むと同時に、決して我國建國の根本と相容れない思想に惑はさるゝことなく、いざといはゞ自己の幸福は勿論、一身を犧牲にして國家に献げるといふ、善美な忠君愛國の精神を、青年の頭に叩き込むことを根本精神となし、青年をして其眞に歩むべき路を誤らしむることなく、所謂日本魂の鍛錬を以て青年指導の主眼として、かくて國民思想の統一に努力しなければならないことゝ思ふのである。そこに青年指導の根本主義がなければならぬのであつて、また此精神によつて青年の修養を計るといふことに、始めて青年指導の最も大きな意義があり、青年團の青年團としての本當の價値があるのである。青年團をして單に一個の事業團たらしめんとするが如きは、誠に其の本と末とを誤つたもので、

青年團はどこまでも此意味に於ての修養團であるべく、よしやそれがどんな事業を行つたにしても、此根本の精神を修養する意味から、其事業を行ふといふことでなければならぬのである。

二〇　如何にして其目的を達すべきか

それでは此根本精神を以て、青年の指導に從はんとするに方りては、如何にすれば其目的が達せられるだらうかといふと、云ふまでもなく肉體に於ても知識に於ても、立派に發育してゐると同時に、精神の修養鍛錬のつんだ、意志の剛健な、進取的な奮鬪的な氣象をもつて居つて、平時の戰爭に勝つことの出來る上に、一朝事あるもピクともせぬ樣な底力のある、平素からの準備の十分に出來上つた良民に、青年を仕上げることに努力しなければならぬのである。良民であるといふことは、つまりが、良兵であるといふことであつて、良民であるものは、いざといふ時には、いつでも立つて君國の爲に身を犧牲にして働く良兵となることが出來、平時に於ては農工商や學問や其他色々の事業に對して十分の努力をなし、國家をして繁榮富强ならしめることが出來るのである。斯の如くしてまた國民全體の戰である將來の戰爭に於ても、平時の大競爭に於ても、本當に勝つことが出來、全世界を敵としても立派に勝利を得ることが出來るのである。

成程獨逸は强いにはちがいないが、以上の如くにして日本が眞に繁榮富强にさへなつてゐれば、其强い獨逸も決して恐れるには足らぬのである。今日の日本國民は獨逸の强いのに感心し過ぎて、聊か獨逸を恐れてゐるやうな傾があるが、それは甚だ愚なことである。吾々は恐れるよりも前に先づ强くならなければならぬ。青年の指導者は此點を力强く青年の頭に吹きこむことも忘れてはならぬ。

處で此處に私が良民は卽ち良兵であるといつたところで、決して私は國民を擧げて悉く軍人たらしめんとし、若しくは斯かる希望をもつてゐるといふ譯では絕對になく、實際に於てまた斯くの如きことを望んだからとて出來る筈のものでなく、只正義を愛し、意志の剛健な、凡ての方面に發展し得る、氣象の奮鬪的な、體の丈夫な、積極的な國民を作り上げれば足るのであるが、一面に於て、今後の戰爭が、果して軍人のみの戰爭でなくして、國民擧つての大戰爭でなければならぬことを思ひ、又一面に於て、國民は戰時に於ても平時に於ても、國家の爲には皆是れ國を護る軍人であつて、要するに軍隊は國民の影であり、民强くして其兵始めて强く、所謂富國强兵は、只國民の力の外に現はれた現象に過ぎず、つまりは只國民が常住不斷强いことが大切であることを考へると、少年に對する義務敎育も、義務敎育を終つてから軍隊敎育を受ける迄の青年に對する社會敎育も、其後に於ける軍隊敎育も、結局一貫した主旨の下に行はれる可きものであらうと思ふ。此の意味に於て、今後の青年を指導するに方りては、以上述べた樣な、歐洲大戰の與へた敎訓に鑑みて、先づ私が常に主張しつゝある協同服從規律の三つの德義心の涵養によつて、青年の精神鍛錬を行ひ、以て益々堅固なる國民精神の統一を謀るといふことは、今日の日本に於て最も重要であり大切なことであると私は信ずるのである。

云ふまでもなく協同服從規律の三つは、軍隊に於ては特に軍紀と稱するものであつて、卽ち軍隊の精神なのである。此三つのない所には、軍隊は決して十分の能力を發揮すること出來ず、卽ち之ありて始めて軍隊は自ら强く、又立派な活動もすることが出來るのである。されば軍隊敎育は主として、此德義を養ふことを趣旨とするのであつて、所謂軍隊敎育といふのは、世間の人が、動もすると思つて居るやうな、武技だとか敎練だとか、戰爭をする技術ばかりを敎へることでは決してなく、敎練や武技を練習して居る間に、此德義心の涵養によつて、何時と

なく國民の精神を鍛錬し、それと同時に自然と體力を強健にすることを目的として居るのである。云ひかへれば教育勅語に仰せられてゐるやうに、絶えず修養をつんで、何事も君國のことを先に考へて、一身一家のことを後とし、恥を知り名節を重んじ、一旦事あらば、進んで國家の危きに臨み、大義の爲には潔ぎよく命を棄てゝ、悅んで自分の務に斃れるといふ古來父祖相傳へて來た、我國の重寶である忠國愛國中國民精神を益〻發揮するやうに、國民中の花である健全な壯丁を教育し、之と同時に其體育と智育を計らうとするのが、卽ち軍隊教育の目的であつて、其目的を完成する上に於ては、協同服從規律の三つが最も主要なるもの、卽ち軍隊教育の根本精神をなすものとして重んぜられてゐるのである。

軍隊教育の目的がかういふものであり、其處に重んぜられてゐる協同服從規律の德義が、また忠君愛國の國民精神を完成する上に於ての根底をなすものであるとするならば、此三つの德義心といふものは、決して軍隊ばかりの專有であるべ

き筈はないのである。實際に於て此三つの德義心は單に軍隊ばかりでなく、亦一個の團體である一村や一郡や一縣は勿論、進んでは國家が進歩し發展せんとするにはなければならぬものであつて、これあつて始めて自治も完全に行はれ、社會的事業は勿論のこと、一般公私の事業も始めて立派に運轉されるのである。殊に日本の樣な特殊の成立を有つた國家が、愈〻見事なる發展を遂げて行かうとするには、一般國民にとりて缺くことの出來ないのは實に國家的德義心なのである。所謂忠君愛國の心と云ひ、日本魂と云ひ、結局は此三つの德義が凝り塊つて一個の形となつて發現したものに過ぎないのであつて、此三つの德義なくして、忠君の精神も愛國の心も、決して現はれることはないのである。して見ると、先づ此三つの德義を涵養するに努めるといふことは、個人主義思想の益盛ならんとし、これまで久しく天祐ばかり受けて來たに慣れて、國民漸く惰眠を貪らんとする今日の日本に於て、今後の青年を指導して行くのに蓋し最も大切なことではなから

うか。云ふまでもなく彼等青年にとつては、義務教育を終へて後、軍隊教育を受けるまでの期間が、最も誘惑に陷り易く、精神上に於ても最も不安心な時期にあるのであるから、此期間を利用して、此三つを以て彼等の精神を陶冶し、知らず識らずの間に、彼等の單純な頭に忠君愛國の思想を力强く吹き込み、日本魂の根底を立派に培ふに努めるといふことは、要するに堅固なる國民精神を鍛錬し、健全なる國民思想の統一を謀るといふことに外ならぬからである。

二　青年指導の實際的方法

さて以上述べた所によりて、青年指導上に於ての根本精神なり、如何にして其目的を達すべきかの大綱が分つたとすると、最後に、私は青年指導の上に必要な實際的方法について說く所がなければならぬ。

先づ體育の方法としては、時々色々な體操を行はせるとか、或は時を定めて種々の競爭や遊戯をやらせるとか、乃至は隊を組んで山野を跋渉させるとか、夏は游泳を行はせるとかして、一郡毎に一個の優勝旗を作つて、毎年の徵兵檢査に甲乙の合格者を最も多く出した村に之を授け、自然に體格養成といふことを競爭させるも而白からうと思ふ。尤もそれにはトラホームだとか、花柳病などに罹つたものは、體格は良くとも成蹟の惡い方に繰入れて、かういふ病氣にかゝるといふことは宜しくない。恥づべきことであることを知らしめるやうに努めなければならぬ。

又體育の一方法であると同時に、剛健な氣風を養成する一手段としては、近來各地に漸く行はれかけて居る朝起會といふものを組織し、一定の時刻に、或は喇叭を吹くとか大鼓を打つとか、又は鐘を鳴らすとかして、一村の青年を叩き起し

それによつて早起の風を奬勵するといふことは甚だ善いことだらうと思ふ。そして一定の所に集合して、隊を組んで氏神に參拜し、傍神を崇ふ風を養ひ、或は序に道路の修繕を行はしめるといふやうなことも面白いことである。或はまた諸方で行はれてゐるやうに、朝起を利用して、附近の山に登ることを奬めるといふも一つの方法であらう。

それからまた其土地〳〵に應じて相當の規約を設けて、青年團員は煙草を吸はぬ、酒を飲まぬ、飲食店に立よらぬ、夜遊をせぬ、襟卷や外套などは一切用ひぬ、又土地によつては炬燵にあたらぬ、といふやうな風にし、其土地〳〵の惡い氣風を矯正することに努め、規約を破つたものは、除名して交際もせぬ、共に友とするに足らぬものとして團員互に爪彈するといふ位にさせ、指導者はまた之を悔悟せしめて、漸次惡風を矯め直すやうにして行かなければならぬと思ふ。

また凡て時間を嚴重に守る氣風を養ふといふことが、非常に大切であつて、集會

などは勿論のこと、約束した時間はお互に決して違はぬといふ風にさせることが必要であつて、之と同時に何事もきちん〳〵と實行し、祖先を崇拜する風を養ひ毎朝起きた時にも、毎晩寢る時にも、父母長者に對しては心から眞面目な敬禮をし挨拶をするといふことをも怠らないやうさせなければならぬ。

また一週に一回か二回かは、夜又は時には晝など、青年を補習學校に集めて、精神修養上の訓話をするとか生産上のことを敎へるといふことも必要であらう。生産といへば、青年團に對して、生産上の仕事を敎へるばかりでなく、その方面の仕事を平生させるがいゝと說くものもあるが、成るほどそれも青年團を導く一つの方法ではあらうが、只仕事をさせるといふこと丈けが、青年團の青年團たる譯であるといふやうに決して考へてはならぬと私は思ふ。仕事をさせるならさせるにしても、必ず青年指導の根本の精神を忘れないやうにして、青年を導びいて行くやうにしなければならぬ。さういふ風にしてやれば、生産上の仕事をさせる

といふことも青年相互の親み合ふ機會を作ることとなり、從つて協同心を養成するといふことにもなり、自然と一つの修養になると、結局青年團の意義も明になり、また其目的も達せられることであると思ふ。

それからまた青年を導く上に於て、決して忘れてならぬ一つのことは、勤儉節約をすゝめて、貯蓄心を養ふといふことである。一般の社會は、近頃甚だ贅澤に流れつゝあるやうであるから、贅澤といふことが一つの不德であり又不幸の原因であることを十分に說いて、出來る限り質素な風を養ふことに努めなければならぬ。それには絕えず日記をつけて、計算を明にさせるやうにすることもやるがよからう。と同時に青年團員といへば着物は必ず木綿の筒袖に限ることとし、表附きの下駄などは思ひもよらぬといふ風にしなければ駄目である。そして飲食物にも決して贅澤をせぬやうに導かねばならぬが、それには平素から粗食に甘んじて、雜穀を食ふとか、薩摩薯や馬鈴薯などを以て飯に代へるといふやうなことも平生から十分に練つて置かなくてはならぬ。今後日本が大戰爭をするといふやうなことがあれば、食物の制限は直ぐに行はれることであつて、其時に對する準備が平生から十分に出來て居らぬと、迚も戰爭は一年と續けることの出來ぬのは眼に見えたことであるから、粗食が必しも營養分に不足を來すものではないといふことを敎へて、食物の贅澤はよく誡めて置かねばならぬことである。

かういふ風にして、協同服從規律の德義を養ひ、體を丈夫にして、よく困苦缺乏に耐へることの出來る剛健な氣風を作り、進取的な、發展的な、奮鬪的な、徹頭徹尾正義を愛する青年に仕上げるといふことが、眞の青年指導であり、青年の敎育であると私は思ふ。そして又私は青年團を指導するに方りては、決して形式や理窟に走るべきものではなく、どこまでも實行が先であるといふことを忘れてはならぬと考へるのである。蓋し實行の前には千百萬言も三文の價なく、理窟や形式は一發の砲彈で直ちに消えてしまふものであるからである。

二二　青年指導上の態度について

最後に青年の指導上の態度に於て、最も大切なことである一つは、此事業はどこからどこまでも公正純白なものでなければならぬといふことである。即ち政黨政派に關係なく、職業の如何を論せず、また階級の如何を問はないで、凡て心からの同情を以て行はるべく、そして決してそれが政黨や黨派の爲に利用されたり惡用されてはならぬといふことである。從つて、また如何なる利害關係を伴つたものでも、此團體中には加へることのないやうにし、二十歳を以て青年團員の上の境とするといふことは、嚴重に守られるべきことであると思ふ。之を越えたものを加へるといふことは、結局種々の利害關係や黨派關係をもつたものを之に交へることになり易く、從つてまた公正純白の性質を缺くことゝなるからである。私は青年團は、どこからどこまでも一個の修養團でなければならぬと思ふ。

それからまた、在鄕軍人會が青年團と密接の關係をもつて、常に相携へ相扶けて行くといふことは、決して惡いことではなく、それが立派に行はれてゆけば、戰時に於ては國軍の戰鬪力を增加することゝなり、平時に於ては國家の良民である在鄕軍人が、青年と相携へて社會の秩序を支へ、健全なる國民思想を產み出すことゝなつて、誠に結構なことであるが、其方法が宜しきを得なかつたり、在鄕軍人が餘りに深く立入り過ぎたりするといふやうなことは、政黨政派の關係と等しく結局宜しからぬ結果を生み出さぬとも限らぬのであるから、其處には在鄕軍人側にても十分の注意を拂はなければならぬと思ふ。私は軍人として特に此點の注意を促して置きたいと考へるのである。

勿論私は一個の武人たるに過ぎないから、其說く所必ずしも悉く立派なものではないかも知らぬが、陰かに歐洲大戰の敎ふる所に鑑み、我國現時に於ける青年指導法の未だ甚だ初期に在るを思ふ時は、徒らに默つてばかり居るべきでな

いことを思ひ、聊か青年の指導に方らるゝ方々の參考に資せんとして、斯くの如く數千言を費した次第である。敢て國民を擧げて悉く軍人たらしめたいといふやうな非望を以て、之を述べたのでないことは、終に臨んで重ねて力强く一言して置かなければならぬことと思ふ。

歐洲大戰の教訓と青年指導 終

大正七年五月十日印刷
大正七年五月十五日發行

歐洲大戰の教訓と青年指導
正價送料共貳拾錢
（郵便切手代用は壹割增とし壹錢貳錢切手に限る、但振替口座へ拂込の際は手數料として別に壹錢添へられたし）

著者　田中義一　東京市本郷區西片町十番地
發行者　若月保治　東京市神田區一橋通町十五番地
印刷人　坂田作藏　東京市神田區一橋通町十五番地
印刷所　盛明舍

發行所　東京市本郷區西片町十番地ノ一
振替口座東京貳貳七〇〇番
新月社

送金御注意（御送金は本社振替口座へ御拂込が最御利益で安全です　用紙の裏に手紙もかけます▲代金は前金に限ります▲代金引換郵便又は集金郵便は高くついて御損です）

青年團中央部藏版証
不許複製

陸軍中將　田中義一著

未入營補充兵のしるべ

定價送料共
金拾參錢

補充兵であつて、入營して軍隊教育を受けぬからとて、自分が軍人でないなどゝ心得て居るのは大なる間違である、かういふ間違つた考のないやうに、まだ入營せぬ補充兵が、平生から心得て居るべきことを、至つて分り易いやうに、田中中將が說明されたのが此書である。新に補充兵になつたものは勿論、未入營補充兵が、簡閲點呼を受ける前に、是非共一應讀んで置くべき書である。

帝國在鄕軍人會本部藏版

發行所　東京市本鄕區西片町十番地ろノ一
振替口座東京貳貳七〇〇番　新月社

279.A
19

終